

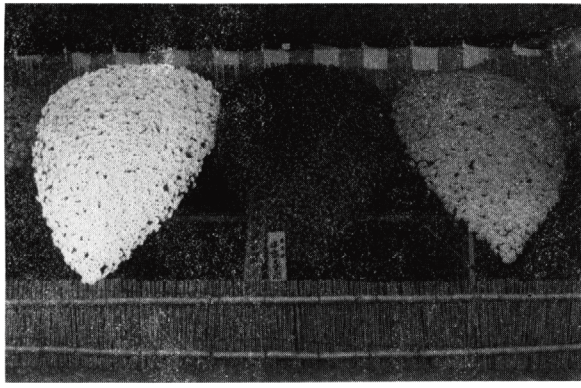


毎月十五日発行 所 社 大 会 宗 像 定価 一年送料共 1000円

第十七回西日本菊花大会

内閣総理大臣賞に

海藤義太郎氏 春日市



この日宗像青年会議所会... 宗像の秋を飾る宗像大社...

この日宗像青年会議所会... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

Advertisement for 'Sonega' magazine, including subscription information and contact details for the publisher.

Advertisement for 'Sonega' magazine, including subscription information and contact details for the publisher.

Advertisement for 'Sonega' magazine, including subscription information and contact details for the publisher.

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社... 宗像の秋を飾る宗像大社...

献茶祭 齋行

而妙齋千宗左宗匠奉納



去る十月十七日、当大社秋の一大行事・第十四代表千宗家元・而妙齋千宗左宗匠による献茶祭が厳かに執り行われた。

この献茶祭は昭和三十一年十月、当大社の宗匠大鼓の宗匠復興興期成会々長であった出光佐三氏の御尽力により、第十三代表千宗家元・即中齋千宗左宗匠の奉納が実現したもので、それ以来恒例の行事となっており今年で第二十五回目となる。

家元直々の御奉仕による定期の献茶祭は九州地区では異例のことでもあり、茶の道志す人々にとっては特筆の行事である。

前夜半よりの降雨で一時心配された天候も、明け方には治まり秋空の広がる好天となった。

九州・山口の各県からは、表千家家元の御恩則を問前に拜見せんとし、早朝より宮廷における相模の齋会以前の原形を、農業の近代化と同じような感慨を抱かざるを得ない。

各地の神社で行われる新嘗祭も、かなり異なるようである。都市部の神社はもとより、地方の神社にまで、収獲感謝の祈りが薄らいでゆく傾向が認められるのは、神社神道の本質にかかわることはあるまいか。三大祭の一つとされる位置づけが空しいほどに、重なる新嘗祭を奉仕する神社がある。氏子は収穫した一品を必ずお供えしなければならぬといわれ、不作もお供えするようだが、場合によっては、塩でも切らぬ、炭でもよいといわれ伝えている。塩や炭は常備のものだから、収穫の秋には何かを献じて神の恵みを感謝しなければならないとした素朴な信仰を維持しているのは、土地柄ばかりでない代々の神祇の教化によるもので、延々と「相模を守る会」を結成し、氏子数が少ないので、叔父と甥が取り組んだり、従兄弟同士が対戦したりという珍らしい光景もみられたが、ヤンヤの喝采を浴びたのは、五十三歳の会長と祭典奉仕を終えた若い宮司との大一番であった。取材した民放のテレビは、過激な進行地域で神社を中心とした村おこしが再開しつつあることを忠実に伝えていたが、これとて、熱意ある宮司とそれを支える氏子リーダーの郷土愛への燃焼はかならない。もちろん、祭りの展開には現代社会への工夫が必要であらう。

(神社新報より)

古式祭の御案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことであり、氏神様に対して一年の神恩に感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で焚いた御飯を神様にお供えし、氏子の人達が一緒にいたたく神事でありませう。

この行事は宮中に於いては、陛下が神喜殿に於て新嘗祭を行ってられるのと同じ性質のもので、この古式祭は「延命招福」の集いとわいれませんが、「氏神和楽」を共に一年間の喜びを分かちあうといった「神和楽」を共にする年に一度の集会であることに、このお祭の意味があります。

八百年以上の伝統を持つ宗匠大社の古式祭には、特別神楽や、江口の浜よりあがるガササという海深をお供えして、お座を催すのが古来からのしきたりなのです。又、くじが行われ、御神像や神盃が授けられます。

是非とも皆様方おさそい合せの上御参拝下さいませう。御案内申し上げます。

記

- 一、日時 十二月十五日(火曜日)
- 一、祭典 午前六時
- 一、お座 午前六時三十分〜午前九時
- 一、場所 祭典 本殿
お座 清明殿
- 一、お座料 (一名分)
白米一升又は金五〇〇円

重なる新嘗祭を奉仕する神社がある。氏は収穫した一品を必ずお供えしなければならぬといわれ、不作もお供えするようだが、場合によっては、塩でも切らぬ、炭でもよいといわれ伝えている。塩や炭は常備のものだから、収穫の秋には何かを献じて神の恵みを感謝しなければならないとした素朴な信仰を維持しているのは、土地柄ばかりでない代々の神祇の教化によるもので、延々と「相模を守る会」を結成し、氏子数が少ないので、叔父と甥が取り組んだり、従兄弟同士が対戦したりという珍らしい光景もみられたが、ヤンヤの喝采を浴びたのは、五十三歳の会長と祭典奉仕を終えた若い宮司との大一番であった。取材した民放のテレビは、過激な進行地域で神社を中心とした村おこしが再開しつつあることを忠実に伝えていたが、これとて、熱意ある宮司とそれを支える氏子リーダーの郷土愛への燃焼はかならない。もちろん、祭りの展開には現代社会への工夫が必要であらう。

(神社新報より)

三十六歌仙扁額 (一)

「黒田新統家譜五」(延〇〇)年十月、関ヶ原の役下九州各地からの北上す室八(一六八〇)年九月の功勳により筑前福岡藩を群藩制において、良く具寄進し給ふ。絵は狩野法台、長慶長一(一六〇六)世神尾の英傑大宮司氏眞眼永興筆、歌は持明院基時(一五五五)年田島村八幡宮(辺津宮)に於て書進している。これは、「田島村八幡宮」に於て書進している。これは、「田島村八幡宮」に於て書進している。これは、「田島村八幡宮」に於て書進している。

○〇〇年十月、関ヶ原の役下九州各地からの北上す室八(一六八〇)年九月の功勳により筑前福岡藩を群藩制において、良く具寄進し給ふ。絵は狩野法台、長慶長一(一六〇六)世神尾の英傑大宮司氏眞眼永興筆、歌は持明院基時(一五五五)年田島村八幡宮(辺津宮)に於て書進している。これは、「田島村八幡宮」に於て書進している。これは、「田島村八幡宮」に於て書進している。

黒田長政は慶長五(一六〇六)年、中国地方からの南

農耕儀礼の変容

先月、急ぎ足に東北の旅をして、稲の収穫風景に心を寄せながら、わずかに安堵を覚えた。西日本では多くの農家がコンバインを使って、刈り取るのと同時に短く刻まれた藁が田圃に撒かれて行くのに、東北では昔ながらのハゼ干しや「籾掛け」と称する稲積みがいたるところに見られ、祖先以来の生活の知恵をなつかしむことができた。そうした作業がまだ行われているというところは、農業の後進性ではなく、農業の本質的なものが大事にされているという印象を受けた。

四横綱四太の揃った大相撲九州場所の人氣が日増しに高まっているが、相模が本来、農耕儀礼に発していることを知る人は少なくない。諸説はあるものの、四股を踏むのは田圃の土中に潜り込んで、いかもしれない悪魔を踏みつけて、その働きを封じ込めるという所作で、突きは稲の成長を妨げる邪悪なるものを追い払っておく呪術的な行為であったとする見方などもあって、

参拜者のほとんど無い祭典がいつの間にか行われてしまっていて、この季節を代表する祭典は恰も七五三詣りのような印象を与える。近代化と言った名は、神社が都市化、近代化を越え、時代を越えて、現代の風潮を超えてきた。地方によっては、いまま「八十御膳」と称する献儀を中心とする泊に丁

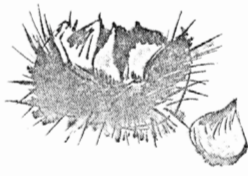
重なる新嘗祭を奉仕する神社がある。氏は収穫した一品を必ずお供えしなければならぬといわれ、不作もお供えするようだが、場合によっては、塩でも切らぬ、炭でもよいといわれ伝えている。塩や炭は常備のものだから、収穫の秋には何かを献じて神の恵みを感謝しなければならないとした素朴な信仰を維持しているのは、土地柄ばかりでない代々の神祇の教化によるもので、延々と「相模を守る会」を結成し、氏子数が少ないので、叔父と甥が取り組んだり、従兄弟同士が対戦したりという珍らしい光景もみられたが、ヤンヤの喝采を浴びたのは、五十三歳の会長と祭典奉仕を終えた若い宮司との大一番であった。取材した民放のテレビは、過激な進行地域で神社を中心とした村おこしが再開しつつあることを忠実に伝えていたが、これとて、熱意ある宮司とそれを支える氏子リーダーの郷土愛への燃焼はかならない。もちろん、祭りの展開には現代社会への工夫が必要であらう。

(神社新報より)

年代	関連事項	備考
天文十四年 (一五四五)	この年 編寿丸(氏眞)黒川の館に生る(宗像大宮系図)	この年陶晴賢、大内義隆を殺害す(公卿補任)
天文二十年 (一五五二)	九月十二日 編寿丸、周防より宗像に入る(新撰宗像記考證ほか)	
天文廿一年 (一五五三)	九月十一日 編寿丸、宗像の本姓に復す	
弘治三年 (一五五七)	四月廿四日 辺津宮第一宮内陣より出火の爲、殿舎炎上し境内全域灰燼に帰す(宗像第一宮實殿置札)	この頃までに編寿丸、氏眞と改名す
永祿二年 (一五五九)	九月廿五日 大宮司宗像氏眞、白山城を退去し大島に渡る(宗像第一宮實殿置札)	九月廿五日、大友義鎮(宗麟)許斐城を攻撃す。この年、狩野三代元信没す
永祿三年 (一五六〇)	三月廿七日 氏眞、大島を落ち許斐城を夜襲し翌日陥落す。後宗像氏眞を元に戻す。(新撰宗像記考證ほか)	この頃、毛利隆元、許斐城攻に一行を加う(款落間録ほか)
永祿五年 (一五六二)	この冬 氏眞鳥ヶ嶽城を完成し、白山城より移り本城とす(宗像軍記ほか)	織田信長、桶狭間に今川を破る

宗像大社歌会 俳句作品集(元六)

福岡中央 力丸 玄風
今年また渡る鳥みち御通か
津屋崎 井浦 良介
みあれ神事風呼ぶ稲穂の充
実感
藤 沢 井上 玄洋
山紅葉分けて布引く玉だれ
の流
津屋崎 西住喜三郎
鯨釣の魚籠をのぞくや小河
豚もる
福岡 広渡一寿軒
咲きて揺れ枯れても揺れる
秋桜
田 熊 安部 ゆき
ぬかづきて弥陀の掌におく
柿二つ
鐘 崎 岩瀬 辰夫
座して見ゆ柿は色づく庭の
秋
田 熊 力丸 一郎
鯛雲種時き終(も)へて速
く見つ



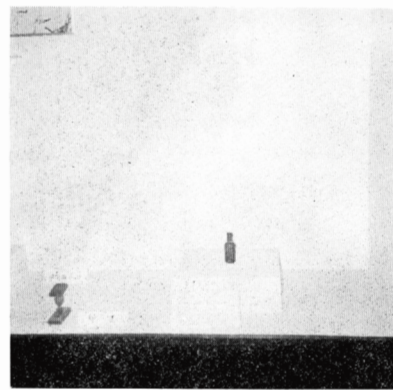
(続)

浪の寄物

23

一本の瓶から (1)

一九八三年二月十一日、あつた。永年、漂砂に晒さ
福岡市東区海の中道の浸食
して崩れた砂地に半分埋ま
れた期間があった。たが
ようにして、この小瓶は
はなかつたが、拾い上げて



見たくなるような、小さく
可愛い瓶である。
高さ九センチ、幅三セン
チ、長い頸はやや傾き、
八角形になった胴部には陽
刻された文字が読める。ま
ず中央に神楽とあり、資生
堂製、東京資生堂とローマ
字で、DISPENSAR
Yとある。Nの字が、と
反対になっているのが面白
い。ぬめぬめとした瓶の色
が気に入った。瓶の色の美
しさを機に瓶を少し集
めてみよう。この瓶を追っ
てみようという興味が湧い
てきた。

まつりと生活 (4)

三節祭について

伊勢神宮の最大の祭りは
神嘗祭です。神宮において
は神嘗祭(かんなめさし)
と六月・十二月に行われる
二度の月次祭(つきなみさ
い)を合わせて三節祭とい
いは三時祭ともい、古来
最も由緒ある重要な祭りと
されています。延喜式とい
う古書に
凡三時祭ハ、六月、九
月、十二月ヲ謂フ
と記載されています。
三節祭の祭の月に注目す
ると、神嘗祭と月次祭は祭
月を異にしますが、祭日は
共に皇大神宮では十六・十
七日、豊受大神宮では十五
日・十六日と一致してい
ます。

神宮の古伝によれば皇大
神宮の御座日は九月十七
日、豊受大神宮のそれは同
月十六日に当たり、結局は
二度の月次祭(つきなみさ
い)を合わせて三節祭とい
いは三時祭ともい、古来
最も由緒ある重要な祭りと
されています。延喜式とい
う古書に
凡三時祭ハ、六月、九
月、十二月ヲ謂フ
と記載されています。
三節祭の祭の月に注目す
ると、神嘗祭と月次祭は祭
月を異にしますが、祭日は
共に皇大神宮では十六・十
七日、豊受大神宮では十五
日・十六日と一致してい
ます。

ものであるか、月次祭はそ
の字の通り毎月に行われて
いたと考えられますが、延
喜式ではすでに、年二度に
なり、中祭として全国の神
社に幣帛が奉られていま
す。又、宮中の神嘉殿とい
うかんで、では天皇によつ
て儀式が行われ、全国の神
社において月次祭が奉
祭は神宮独自の祭りでな
のであります。ただ神宮の
宮参向は、式年遷宮を除け
ば、この三節祭に限られて
いることを見ても、祭
りの重要性がわかると思
います。
では月次祭とはどうい
う祭りで、新穀を天照大神に奉

部制作の高瀬端枝さんから
手紙が届いた。資生堂社
史、そして神楽の履服の古
約束が実現を、津屋崎町
白石浜から勝浦浜まで歩
いた。(この事については
「宗像」浪の寄物十七・十
八号に記した)。そこで三
角形のロシア文字のラベル
が貼ってある小さな瓶を見
つけた。ラベルがまだ貼り
付いていたので調べてみた
だ日数はあまり経過してい
ないものである。「面白
い瓶ですなあ」と城野氏は
大変気に入られた様子であ
る。以後、今日まで城野氏
は小瓶蒐集を(主に採集を
中心として)奥さんと一緒
にされ、あれから一四年
間、今では木棚の上から下
まで所狭しと数百本がす
り並んで仕舞われていま
す。その間、幾本か持っ
て歩いたこともあった。
さて、「神楽」「資生堂
製」、これだけ揃えば、ル
ーツを調べるには不足はな
い。当然、資生堂へも問
合わせをした。資生堂宣伝
の祭りであります。皇皇祭
祀令によれば宮中賢所にお
いても行われ、神嘗祭当日
に天皇が神宮を御拝され
と定められています。新穀
を神々に奉る祭りは神嘗祭
の外に新嘗祭がありますが
神嘗祭は神宮に限って行
われ、九月(現在は十月)に
その年とれた初穂をもつ
て、大御神に聞こし召す祭
りです。
神嘗祭にお供える神饌を
「由貴大御饌(ゆきのおお
みけ)」といいます。つま
り、清浄で立派な神饌とい
う意味です。三節祭に限り
お供えされる神饌です。
神嘗祭は、「外宮先祭
の古儀に従い、外宮・内宮
の順に由貴大御饌が供えら
れます。その式次第を簡單
に説明しますと、先ず外宮
において、十五日の夜十時
から「由貴夕大御饌」が翌
十六日朝「時々大御饌」が翌
大御饌」が行われます。内

して真の良薬たるを知り賜
ん事を興(こたねが)ふ主
治服用の方は能書に委敷
くわしく、配すと雖(いえ
ども)別てコレヲ病病
病下り服用して効能多し
三勿入一版価廿五圓、一勿
五分入一版十二圓五厘」と
ある。
「神くから授かる薬、ふし
きな効能のある薬、不老長
寿の薬」という意である。
一九八四年八月、東京に
へ行った帰りに、フイリビ
高瀬さんが静岡県掛川市に
ある資生堂アートのハウスに
蔵されている神楽一本の瓶
を取り寄せてもらい、見せ
ていただいた。これは大
小の三種の瓶のうちの中瓶
と小瓶で、入り、効能書
も五分ほど残っている。
効能書には「此の神薬は
故佐藤尚先生(医学博士
前順天堂病院院長)の証明
したる神薬の初祖にして本
統のものなれば特に御注意
を希ふ」とある。
の長寿から国民の平安を祈
られ、古式ながらの神秘
的な世界とも言えます。
このように、神宮の最も
重要な祭である三節祭を行
って来た祭の中には必ず
稲が中心になっています。
これは稲作がいかに神道の
まつりや精神に根強く関係
しているかを理解できるの
ではないでしょうか。
(Y・S 記)

宗像郡安海町神楽の草崎
半島突端から西北方約三百
米の海上に勝島がある。東
側に少々勝島がある。この
側で切り立った岩壁で
ある。一番高い所で約六十
米程ある。この島には「勝
理全誌」の勝島の項をみる
と、この島にはその昔、安
部宗任の孫孫宗が立籠り、
山鹿秀遠と戦って大いに勝
利を得たので
「勝島」の名
があるとい
う、とするさ
れ、おのりな
お、寛永の頃
までは勝浦の
内なり、とあ
る。正徳享保
年間には、黒
田家より密買
易の監視取締
の為に「大船
二加子ヲ添テ
置レシガ、其
後彼舟打込シ
カバ、其警備
見エタリ」と
見えるよう
に、当時から
密航船に対す
る警戒の要所
となっていた。
その頃には加
子(菜園)屋敷があつて、
附近に水戸も開かれ約一町
余の島があつた。後に神楽
の行政区画に入った。
「見ると、「山上に城跡
あり、平地二反計、宗像氏
貞永の頃、隣國之敵を避
て大島に渡海し時の端城
なり」と云。」とある。これ
は永禄二年九月に豊後の豪
族大友宗麟の家人奴留湯
泉、麻生領氏ら数万騎が不
意に宗像領内の許斐城を襲
った時のことを指してい
る。

この事件のことを「天正
六年六月朔日宗像第一宮御
宝殿置札」には適確に然も
簡略にとらえている。この
置札は現在の辺津宮本殿
第一宮に収蔵されてお
り、天正六年に、弘治三年
に社殿災上以來二十一年目
に再建される迄の経緯を詳述
しているものである。その
中で「御炎上三箇年目、永
めて押し寄せ、翌朝要害を
乗つ執り、人体を討ち果た
し、軍ぬ。その勢いに任せ
て、古(も)との本領を在
所に斬り返さるる事、遠賀
の庄は芦屋津、広渡河村に
限(及び)び、若宮庄は西郷
限(坂、赤馬)の庄
は領家分領恵村・種元村・
平等寺村・久原村・大種村
・内殿郷、残す所無く御進
止也(御進め
とらる)後略
とあって、
「宗像党」の
活躍のさまを
窺い知ること
ができる。そ
の頃に勝島が
宗像軍の出
城となつて
いたのである
う。
往時は「神
郡宗像」とい
い、宗像郡・
市は今も全部
が宗像大社の
氏子区域とな
っており、篤
い信仰はます
ます熾んであ
る。勝島
は宝暦の初め
頃に漁民万右
衛門という者が島の南端に
波止を築いた。長島三つ間
あり、今も附近漁民の便利
となつている。
同じく南端平地の奥に「
牧大明神」の小祠がある。
九月十日が祭日であったと
いふ。
松の木に蔽われており、山
上の古城地の平地二反歩に
は葎が生い繁っている。行
雲流水の間、千古の物語を
海めて、勝島には今日も玄
海の白波が打ち寄せてい
る。

宗像郡安海町神楽の草崎
半島突端から西北方約三百
米の海上に勝島がある。東
側に少々勝島がある。この
側で切り立った岩壁で
ある。一番高い所で約六十
米程ある。この島には「勝
理全誌」の勝島の項をみる
と、この島にはその昔、安
部宗任の孫孫宗が立籠り、
山鹿秀遠と戦って大いに勝
利を得たので
「勝島」の名
があるとい
う、とするさ
れ、おのりな
お、寛永の頃
までは勝浦の
内なり、とあ
る。正徳享保
年間には、黒
田家より密買
易の監視取締
の為に「大船
二加子ヲ添テ
置レシガ、其
後彼舟打込シ
カバ、其警備
見エタリ」と
見えるよう
に、当時から
密航船に対す
る警戒の要所
となっていた。
その頃には加
子(菜園)屋敷があつて、
附近に水戸も開かれ約一町
余の島があつた。後に神楽
の行政区画に入った。
「見ると、「山上に城跡
あり、平地二反計、宗像氏
貞永の頃、隣國之敵を避
て大島に渡海し時の端城
なり」と云。」とある。これ
は永禄二年九月に豊後の豪
族大友宗麟の家人奴留湯
泉、麻生領氏ら数万騎が不
意に宗像領内の許斐城を襲
った時のことを指してい
る。

宗像むかし話 (23) 勝島

